

レクリエーションの視点から見たマサチューセッツ湾植民地の意義

—アメリカ公共レクリエーションの源流として—

○廣田 治久、 高橋 和敏 (余暇問題研究所)

キーワード： アメリカ公共レクリエーション、マサチューセッツ湾植民地
はじめに

本研究は、1997年本学会大会において発表した「NRPAとその年次大会について」の報告および「NRPAとその kongress について」の紹介（レジャー・レクリエーション研究第38号1998）に続く関連研究として、アメリカ合衆国における公共レクリエーションについての歴史的考察を試みたものである。

その動機は二つある。第一にNRPA（全米レクリエーション・公園協会）の実状や kongress の状況を把握するにしたがって、アメリカ合衆国のレクリエーション運動が、いかに民間団体としてのNRPAを中心とした民間の活力とともに、全米を網羅している公共レクリエーション制度の確立に負うところが大きいかを認識したことである。第二には、“なぜアメリカにおいて公共レクリエーション制度が確立したか”という疑問を解決するには、その原点の所在を究明することが不可欠であると認知したからである。

周知のごとく、アメリカ合衆国は、すでに先住民（アメリカン・インディアン）がいたとはいえ、ヨーロッパ諸国からの移住者による新しい国家形成の過程を経て成立した。すなわち、1607年にイギリス人ジョン・スミス（John Smith）の率いる104人のイギリス人が、現在のバージニア州沿岸に上陸し川を遡り、ジェイムズタウン（Jamestown）のその定住地を建設したことに始まる。次のイギリス人の入植は、1620年のメイフラワー号によるピルグリム・ファーザーズたちのプリマス植民地（Plymouth Colony）であり、1624年にはオランダ人によるニューヨーク周辺への移住があった。そして1630年には、ジョン・ウィンスロップ（John Winthrop）が、約1,000人のピューリタンとともにマサチューセッツ湾植民地（Massachusetts Bay Colony）を建設した。それ以来、多くの植民者がアメリカ大陸に渡り、やがてニューイングランド地方、中部東海岸、南部などのイギリス13の植民地が連合して、1776年7月4日の独立宣言となった経緯がある。

本研究において、マサチューセッツ湾植民地をとりあげた理由は、この植民地が社会的・政治的・経済的・文化的あるいは精神的にも、現在のアメリカ合衆国発展に対して、大きな影響力をもち、まさにアメリカ社会の源流であると考えられるからである。また、時代の推移があるにせよ、歴史の不変性によって現在につながる公共レクリエーションの底流を見いだせる可能性を秘めているものと推察したからである。

アメリカ植民地時代のレジャー・レクリエーションに関する歴史的文献は、少なからず検索できるが、公共レクリエーションとの関わりについての記述は、ほとんどが1800年代からである。したがって、アメリカ独立以前に遡ってアメリカの公共レクリエーションを考察することは、とくにその精神的基盤を確認する上で重要と考えられる。

本研究の目的は、以上の視点から、マサチューセッツ湾植民地の生成過程および当時の社会制度の中から、現代のアメリカ合衆国公共レクリエーションの源流を探求し、その意義を確認することにある。

方法

本研究の目的を達成するために「原点アメリカ史」第1巻植民地時代、第2巻革命と建国、第3巻デモクラシーの発達（ともにアメリカ学会訳編、岩波書店1982）の中から、公共レクリエーションに関係ある部分を抽出し、さらにそれらの部分についての関連文献の使用とウェブサイトの検索によって、その考察を行った。

移住の宗教的背景

イギリス人の北米大陸への移住の動機は、大別して経済的および宗教的背景がある。すなわち、前者はその生計のための欲求にもとづくものであり、後者は宗教上の自由を望む要求にもとづくものであった。ここでは、後者の宗教的背景に触れたい。

1620年のピルグリム・ファーザーズのプリマス植民地建設（1691年マサチューセッツ植民地に併合）、および1630年のマサチューセッツ湾植民地の建設は、その多くがピューリタンによってなされた。ピューリタンとは、イギリス国教会の制度に反対し、純粹に聖書の教えに従うことによって浄化することを求めた分離派（あるいは非分離派）のプロテスタントたちをいう。

このようなピューリタンたちは、聖書にもとづく理想の共同体を実現しようとして移住し、清貧な信仰生活を重んじ、勤勉な生活態度を保っていた。その根底には“神に選ばれた者”としての使命感に燃え、神と自らが契約によって結ばれていると信じる宗教思想があったからである。それは、その後の植民地における独自の制度的発展の基礎となった。

さらにこの思想は、その後分立した北部の他植民地にも大きな影響を及ぼし、ニューイングランドといわれる特色ある地域としての発展を遂げるに至った。ニューイングランド人は、自立心が強く、公共への義務感、営利の才、勤勉な生活態度、教育熱心であるといわれる気質を生み出した。ちなみにヤンキー（Yankee）という語も、はじめはニューイングランド生まれのアメリカ人を指していた。

現代のアメリカをみると、その政治形態をはじめ社会制度のあり方や、時には独善とも受け取られがちなアメリカ人の“正義”“自由”“平等”の思想も、このような背景に深く根ざしていることを見逃すことはできない。

公共レクリエーションの源流とみられる諸点

アメリカ合衆国における公共レクリエーションの源流を探究する視点として、現代のアメリカ公共レクリエーションの特徴を次の4項目に設定した。すなわち、公共レクリエーションの核としての“ファミリー”と“コミュニティ”、“公園とレクリエーション”および“自然保護とレクリエーション”である。これらの諸特徴とマサチューセッツ湾植民地の史実と関連性のある事項を考察した。その結果は、下記のとおりである。

■ファミリー・レクリエーションとしての感謝祭

1620年12月21日、プリマスに定住を図ったピューリタンたち102人の生活は厳しかった。すぐ冬を迎え、飢餓と戦いながら、春を迎えることなく、その半数は死亡したといわれている。やがて春となり、アメリカン・インディアンに教わったトウモロコシの栽培を始めた。その秋には、はじめての収穫を終えることができた。1621年の秋であった。彼らはその収穫を喜び、神に感謝するために、家族をはじめ近隣の人たちやアメリカン・インディ

アンたちも招待して食事会を開いた。現地でとれた七面鳥や鹿の肉、トウモロコシなどを食べたという。これが“感謝祭—Thanksgiving Day”の発端である。

現在は“感謝祭”として、アメリカ合衆国連邦法の定休日となっている。ふつうアメリカの祝祭日は、州で制定することになっている。そうした点で、この感謝祭は全米一斉に祝われるのは例外的といえよう。1789年、ワシントン大統領時代に、全国的祝日となった。その後幾度かの変更を経て、1941年以降は、11月第4木曜日となった。

この日を中心に、ふだん別れている家族も集い、団欒や交流を図り、家族の絆を強める良い機会となっていることは、家族の多様化が進むアメリカにおいて、ますますその重要性が認識される場所である。

また昔ながらの七面鳥の丸焼きとパンプキン・パイを食べる習慣が、現代でも続いていることは、アメリカ人としてのアイデンティティを確認する機会ともなっている。この感謝祭は、ヨーロッパ諸国から継承された制度ではなく、プリマス植民地時代の初期に、独自にできあがった習慣が制度化されたものとして注目される。それとともに、現代にみられるアメリカ人のファミリー重視の思想やファミリーを核とした現在のアメリカ公共レクリエーションも、植民地時代の収穫を感謝するというファミリー・イベントに大きな影響を受けてきたものとして注目される場所である。

■タウン・ミーティングとコミュニティ

前述のごとくマサチューセッツ湾植民地の建設は、1630年セーラムおよびボストンを基点として始められた。その目的は“新しい教会と新しい民国 (commonwealth)”の創設であった。すなわち、封建的なイギリス国教会のしきたりを排除し、聖書の教えにもとづく教会の設立と、国民の同意と契約によって共通の利益と目的で統一された国家の建設を目指したものである。

この理想的社会実現のため、その政治形態としては、植民地の移住者ひとりひとりが自由公民であり、その統治権限は、自由公民から選出された者に付与されることが基本となった。植民者は、マサチューセッツ湾地域の各所に分散して入植したので、各地に散在する村落をひとつの単位社会とした。すなわちタウン (town) の成立である。ひとつのタウンには必ず教会 (congregation) が設けられ、その教会員が、即公民であるとされた。このタウンが地方政治制度の中核となり、タウンにおけるあらゆる問題を討議・審議する最高議決機関として、タウン・ミーティング (town meeting) があった。現在でもみられる唯一の直接民主制の形態である。したがって、各タウンから選出された代表者が、ボストンに集まり、総会議 (現在の議会) を構成し、マサチューセッツ湾植民地の総督や役員を選出した。この形態の原型は、すでに1620年メイフラワー号において上陸前になされた「メイフラワー誓約書 (The Mayflower Compact)」にみられる。

タウンは、ひとつのコミュニティを形成し、その連帯性は、彼らの宗教的信条と厳しい開拓生活の中での共同によって培われてきた。さらにタウン・ミーティングは、彼らの生活にとって共通の必要な事項を決定する。現代でいう住民のニーズが直接反映される機会であった。したがってレクリエーション問題がコミュニティ行政の一環として、社会・経済・教育問題などと同様に認知されている現代のアメリカ公共レクリエーション制度は、マサチューセッツ湾植民地時代のタウン・ミーティングという直接民主制の延長線上にあるものとして捉えることができる。

■公有地とコモン

そもそもマサチューセッツ湾植民地の成立は、「マサチューセッツに対する第一の特許状 (The First Charter of Massachusetts)」を有するマサチューセッツ湾会社によって進められた。それゆえ、この植民地の土地は、この会社の所有であった。各タウンは、その配分によってできあがった。各タウンの土地は、公有地として確保され、個人には計画的に売却されていた。土地の税金が基本的なタウンの財源となっていた。また、タウンには教会が、タウン会議を兼ねて、共有のものとして建てられた。もともとヨーロッパ諸国では、町や村の教会や庁舎の前には広場をつくるしきりがあり、マサチューセッツ湾植民地においても、いわば故郷の伝統にしたがって、こうした共有の広場が設けられたといえよう。この広場 (オープンスペース) の名称が「コモン (common)」であった。この広場の直接の目的は、家畜や羊などの放牧であったが、それと同時にタウンの集会、祭礼、マーケットあるいは民兵の訓練場として利用されていた。

1634年には、ボストンにおいて大々的なコモンが建設された。なぜならばボストンは、マサチューセッツ湾植民地の中心であり、政治・経済・文化などの中心都市として、急速に都市化が進行したからである。「ボストン・コモン (Boston Common)」として、アメリカにおける都市公園の原型とされている。はじめは公共広場の機能のみであったが、1728年には、現在に見られるようなレクリエーション機能も認められるようになった。

公園とレクリエーションが合体してきたアメリカ合衆国の公共レクリエーション制度も、このような経緯によって、大きな影響を受け継いできたものと認識できよう。

■自然保護とレクリエーション

マサチューセッツ地方は、中部や南部植民地と異なり、丘陵森林地帯が多い。家を立てたり農耕地を確保するには、木の伐採が必要となる。とくに辺境地においては、開拓者の自由になっていた。しかしながらプリマス植民地では、すでに1626年に、木の伐採に対する規制が設けられたという。また、マサチューセッツ湾植民地においては、1641年「大水域法令 (Great Ponds Act)」によって、フィッシングや鳥類ハンティングのための水域を定めた。これらの活動を認めると同時に、それらの乱獲を防ぐ目的であった。1600年後半には、狩猟のシーズン規制も設けられたという。

このように、アメリカにおける自然と人間との関係は、人の手のかからない土地への入植があつて獲得されたものであり、現代アメリカの自然保護思想とレクリエーションとの関わり方の素地をみることができる。

まとめ

マサチューセッツ湾植民地時代は、プリマス植民地時代を含め、1620年から1776年の約1世紀半にわたる。日本が徳川幕府開設17年後から安永年間までにわたる。少なくとも3世代の交替があつたのである。植民地の成立過程をみると、人々の幸福が最優先され、その社会制度も、そのための公共的役割を重んじてきた植民地の在り方が、現代のアメリカ合衆国の基本として継承されている精神性の強さを、改めて実感するに至った。それと同時に、レクリエーションの公共性が、マサチューセッツ湾植民地時代のアメリカ人にもすでに受容され、かつそれを実現する社会制度を、早くから構築されていたからこそ、現代のアメリカにおける公共レクリエーションの発展につながっていたことが明確になった。